

## ディスカッションの流儀（その2）

学生時代に多様な体験をして、「引き出し」を増やそう！

大和総研 調査本部 副部長 宇野健司



ディスカッションに必要な資質は、3つ。

- ①「抽象論より、具体論」
- ②「反対するときは、代案を示す」
- ③「議論のコーディネーション能力を磨く」

「学力」だけでなく、「人間力」も鍛えることが、バランスのとれた社会人になるための第一歩。今後は、「人間力」を体系的に育成する教育プログラムが必要でしょう。

ディスカッション型の授業などを通じて、人としての「立ち居振る舞い」を体得することは、一生の財産にもなると思います。

### ①「抽象論より、具体論」：自分の体験から語ると、聴き手の関心が高まる

「抽象的な意見を言う人」と、自分の体験談から「具体的な意見を言う人」と、どちらの方が魅力的に見えますか？ 関心を持って聴けますか？ 説得力がありますか？

多くの場合は、後者でしょう。では、そのためには、どうしたらいいのでしょうか？ 1つの答えは、「多様な体験」を積んで、「引き出し」を増やすことだと思います。

つまり、居心地の良い「いつものメンバー」と、内輪で仲良くしているだけではなく、旅行・留学・アルバイト・ボランティア・インターンシップなど未知の世界に、どんどん自分から飛び込んでいくこと。そして、その体験を自分の言葉で語ることで、発言の重みが増します。

よく「目的なしに、短期留学など如何なものか」という人もいます。でも若いうちに、外の世界へ、まずは一歩踏み出してみることは、とても意味のあることだと思います。筆者自身も、そうでしたが、そこから自信を得て、積極的に行動できるようになったりするものです。

「多様な体験」をした人の話は、人の心を打つものです。抽象論だけでなく、自らの体験から、説得力のある具体論を語れる能力は、就職活動や社会人になってからも、生きてくるでしょう。

## ②「反対するときは、代案を示す」：評論家にならず、建設的な議論をしよう

反対するだけなら、誰でもできます。でも、それだけでは何も解決しません。そればかりか、その場のムードをネガティブにし、参加者のモチベーションを下げることもあるでしょう。

「反対するときには、代案を示す」。これが、ディスカッションの場でのマナーだと思います。ただ「賛成・反対を表明する」のではなく、「建設的な解決策を見出す」ことが目的だからです。

代案がどうしても思い浮かばないけれど、反対は表明しておきたい場面も、あるでしょう。そういうときは「代案がなくて申し訳ないのですが、・・・」と、謙虚に発言するよう心掛けるのが良いと思います。このようなことも、社会に出る前の段階で、学んでおくべきでしょう。

## ③「議論のコーディネーション能力を磨く」：論点整理&雰囲気作り&板書

ディスカッションでは、司会者の巧拙が、成否を分けることも多いでしょう。では、コーディネーターとして必要なスキルには、どのようなものがあるのでしょうか？

1つ目は、「論点整理」をする能力です。ただ単に、一人一人の意見の言いつ放しでは、良いディスカッションにはなりません。重要と思われる論点に差し掛かった際には、司会者が一度立ち止まって、「今の意見について、賛成・反対・コメントなどは、他にありませんか？」と、論点を提示した上で、焦点が明確な意見交換に、全体を導くべきでしょう。

2つ目は、「雰囲気作り」です。司会者は、発言しやすいムードを作るようにすべきでしょう。そのためには、明るい表情・柔軟な対応・相づち・リアクション。たまには、参加者の発言にユーモラスに反応したり、笑いを誘う友好的なコメントができたりするといいいでしょう。

3つ目は、「ホワイトボード」をうまく活用することです。メリット/デメリット、問題点/解決案、短期/長期、個人/組織など、論点を簡潔に書き出せると、議論が活性化します。

## 学生時代に「人間力」を鍛えれば、一生の財産になる！

「認知能力」「非認知能力」という言葉をご存じでしょうか？前者は「学力」、後者は「人間力」に近いニュアンスです。両者をバランス良く伸ばしていけるかが、人生の成功を左右するとも、言われているようです。

「学力」については、小学校→中学校→高校→大学と、学校教育の中で体系的に学習するプログラムが一定程度、出来上がっていると思われます。今後は、「人間力」を体系的に育成する教育プログラムが、重要になってくると考えています。ディスカッション型の授業などを通じて、人としての「立ち居振る舞い」を体得することは、一生の財産にもなると思います。

(次回予告：「自分を成長させる習慣」)

以上